

8月24日（日）主日礼拝レジュメ

「辛い仕事」 伝道者の書1章12～13節

伝道者の書＝ヘブル語ではコーヘレス、新共同訳では、コヘレト書。コーヘレスは、話しをするために集まりを召集するとか、人々を呼び集めるとの意味。

12節「伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった」1章1節「エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば」2章1節以下の記述はソロモンを思い起こさせる。ここで言われている伝道者はソロモン王のこと。

13節「天の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて尋ね、探り出そうと決めた。」とは、広範囲に渡ってさまざまなことについて知恵を用いて尋ね、探り出そうとしていたということ。

ソロモンがその時代に尋ね、探り求めたことは、現代における私たちの時代にあっても十分に通用するということ。

「これは、神が人の子らに、従事するようにと与えられた辛い仕事だ」知恵を用いて尋ねることで明確な結論に達することはなく、1章1、2節「空の空。すべては空」とか「日下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか」という結論に導かれることになる。

さらに「心に決めた」内にあるすべてのものを献げきるほどに彼は、天の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて尋ね、探り出そうと心に決めた。「探り出そう」知恵を用いて徹底的に努力して検証するという意味がある。

人というものは、何かを深く考えることが少ないのではないか。しかし日の下で行われる一切のことと自分との関係というのは非常に大切なことではないだろうか。それは、自分が何のために生きているのかという生きる目的、

生きる意味にも関わることであり、それは結局自分の人生をどのように考え、一度しかない人生をどのように生きるかにつながるから。

「日の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて尋ね、探り求める」ことは、神がすべての人に従事するようにと与えられた辛い仕事だということ。それは、神から来ていることであり、神を意識するとか、神を信じなければ、このようなことをしようとは決して思えないということ。私たちは、あまりにも目の前に置かれたなすべきことに追われ、そのことに心を奪われて、本来神が私たちに従事すべきこととして与えた働きを忘れてしまっているのではないだろうか。神を信じる者とされている一人一人は、日の下で行われる一切のことについて神を通してすべてのことを見ることができ、そこには解決があり、空しさからの解放があり、本当の意味での新しさがある。

ぜひ神を通して自分に関わることや自分の周りにあるもの、人生を見ていただきたい、そこにはこれまで見いだせなかった新しい気づきがあったり、そして満足や喜びがあり、人生の辛い仕事からの解放がある。